
らき すた～夏休み前の話

ミナクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた〜夏休み前の話

【Nコード】

N7560F

【作者名】

ミナクア

【あらすじ】

らき すたのこなたの夏休み前の話です。

第1話

夏休み前の最後の登校日。天気の良い朝の教室。明日から夏休みということでみんな浮かれように話をしています。いつもの朝のざわめいた教室の雰囲気よりも浮かれた感じ。こなたたちも例外でなく、こなた、かがみ、つかさ、みゆき達は机をかこんで話をしています。

こなた：（下敷きをうちわ代わりに使い、涼しげな顔で）「いや、ようやく明日から夏休みだねえ。長かった。この日が来るのをどんなに待ち焦がれたことか。特に昨日なんてすごく長く感じたよ」

つかさ：「そうだね。そういえばこなちゃん、この2、3日はそわそわしっぱなしだったよ。」

こなた：「そう見えた？」

つかさ：「うん。変なテンションの日もあつたしね。」

かがみ：「（からかうように）こなたは普段から変なテンションじゃない」

つかさ：「お、お姉ちゃん・・・」

こなた：「夏休みが近づいているんだから変なテンションになるのは仕方ないよ。休みに入ってから嬉しいけど、入る前が一番わくわくするよね。」

つかさ：「うんうん、それよくわかるよ。ケーキとかでも食べて

るときも幸せだけど待つてる間もすごくわくわくするもんね」

かがみ：「なるほどね」。そういう感じか。私もなんとなくわかるかな」

こなた：「ほうほう。かがみはどんな感じで？」

かがみ：（ちよつと考えて）「そうねえ・・・宝くじを買ってもし1億円当たったら、服を買って液晶テレビを買って・・・なんて考えてたりするのってすごくわくわくするわね」

こなた：（何も言わずニヤニヤして、かがみを見る）

かがみ：「・・・ってなんて目で見るのよ？何か言いたそうね」

こなた：「いや、あいかわらずかがみは即物的というか現実的というか妹と違ってずいぶんリアルなわくわく感を語ってくれるなあと思ってたね」

かがみ：「・・・現実的で悪かったわねっ」

こなた：「いやいや。別に悪いことじゃないから。むしろかがみんはこうでないと。妹は夢見がち、姉はしつかりと現実的。こういうキャラ設定のリアルギャルゲを目の前で見れていると思ったら感謝したいくらいだよ。（つかさは困ったように笑い、かがみは、何いってんの？という顔をする。こなたは気にせず話を続ける）まるでクラナドのあの姉妹のような・・・そうだ。かがみんはこれからイノシシの子供を飼ったらどう？で、つかさは占いを趣味にするの。まさにリアル萌えキャラじゃない。」

かがみ：「はあ？なに言ってるの？」

こなた：「かがみんとつかさのキャラ設定だよ。わかんないならいいか・・・とにかく夏休み前特有のこのワクワク感をなんてあらわしたらいいんだろうね・・・。（軽くにぎりこぶしをつくり、演説口調で）私、泉こなたのここ2、3日のやる気はほかのひとの30分の1以下だつ。しかし、今日まで学校に来到ることができたのはなぜか？夏休みがあるからだつ！夏休みが待っているからなのだあつ！」

かがみ：「まゝたアニメのネタかなんかか？」

こなた：「ギレンの演説だね」

第2話

かがみ：「知らないわよっ。アニメもいいけどさあ、今年は高校で最後の夏休みでしょ？ワクワクするのもいいけど、受験の準備とかあるじゃない。もうちょっと気を引き締めなさいよっ」

こなた：「これだからかがみは……。夏休みはこれから始まるんだよ？楽しい夏休みをそんな風に構えて迎えちゃ夏休みに失礼だよ。充実した夏休みを迎えるには自然体で入らなきゃ」

かがみ：「そうなの？」

こなた：「そうだよ」

かがみ：「ふ〜ん。じゃああなたはどんな風に夏休みを迎えるつもりなのよ？」

こなた：（胸を手のひらで叩きながら）「私は決まってるよ。まず思い浮かぶのはマンガを読んだり、アニメを見たり、ネットゲをしたり……。もちろんバイトもやるし、かがみとも遊ぶよっ」

かがみ：「なによ。いつもと変わらないじゃない」

こなた：「それが自然体なのだよ」

かがみ：「自然体って・・・私と遊ぶって言うってるけど、遊ぶんじやなくて出された課題を家に写しにくるだけでしょ？」

こなた：（びくつとして）「さすがかがみん、察しがいいねえ」

かがみ：「あんたの考えてることなんて大体わかるわよ……。はあ、いい年をした女の子がこうやってそろってるのに、なんで朝からアニメの演説やら、こなたの予定なんて聞かなくやいけないのかしら……。(力なく机に体を預ける) もつとあるでしょ？夏休み前らしい話題が。たとえばみんなでプールに行こうとか、花火しようとか」

こなた：「まあまあ……。 (そういえばみゆきさんに話を振ってないな) ねえ、みゆきさん」

みゆき：(ニコニコして話を聞いていたが)「なんででしょうか？」

こなた：「みゆきさんは夏休みってどうやってすごすの？やっぱり受験に向けてずっと勉強するの？部屋にこもるの？私たちとは遊んでくれないの？」

みゆき：(笑いながら手を振る)「いえいえ。ずっと勉強をするわけではないですし部屋にこもったりもしませんよ。もちろんこなたさん達と会って遊んだりしたいです」。

こなた：「じゃあどんな風に過ごすの？」

かがみ：「私も聞きたい」

みゆき：(落ち着いた口調で、軽くひとつ咳払いをして、人差し指を立てながら、にこやかに話す)「そうですね。私が立っている計画では、夏休みは勉強で苦手な部分やしっかり理解していない部分をマスターしようと思っっているんです。わからないところをそのまましておくとあまりいいことはないですからね。(みんなうんう

んと頷く)。どのあたりが苦手なのかはそれぞれの教科ごとにピックアップしてありますのでそれをこなしていくだけです。今のうちに苦手な部分を克服しておいたら秋から冬にかけてスムーズに勉強が進むと思うんです。(みんな頷くがあまりに想像より濃いので微妙に引き気味になる)ちょうどその時期は受験の前なので、とくに大事な時期です。ですから午前中に苦手を復習、それから夜は寝る前に夏休みの課題をちょっとずつやっていくという程度ですよ。私も自然体で夏休みに入る感じですね」(にっこりと笑う)

こなた、つかさ：(目を丸くする。これだけきっちり計画を立ててそれを自然体というのか?)

みゆき：「あと、お昼は自由な時間にして自分の趣味をやってみたり、それから怖い

ですけど・・・途中でやめてしまった歯医者さんにもいかないといけないですね。あとは皆さんとも一緒に遊んだり・・・そうそう、夏休みは色々とイベントもありますしね。ぜひ誘ってください。・・・って、みなさん、どうかされました？」

第3話

こなた：（なみだ目でポン、とみゆきの肩を叩く）「夏休みが終わって、秋から冬にかけてのことなんて考えてもなかったよ。冬コミのことぐらいしか・・・。みゆきさんの話を聞いていると自分が小さく思えてきたよ・・・胸とか、身長だけじゃなくて」

つかさ：「私も」。来週何しようかな、って言うことくらいしか考えてなかったよ。ゆきちゃん、すごいね。」

みゆき：「（赤くなる）そんなことはないですよ」

かがみ：（こなたをちよつとからかう感じで）「こなたの場合、みゆきより大きいのはオタク度くらいなんじゃないの？」

こなた：「むかつ。なんですとお。でも、あたってるから、反論できない・・・」

かがみ：「でしょうね」。いいじゃない、あんたは勉強しなくても一芸入試で変な顔をすればきつと合格出来るわよ、あれは強烈だったわ（みんな思い出し笑いをする）あんたはすごいんだからね」

こなた：「それ、誉めてないから・・・そういえばさ、かがみは夏休みはどう過ごす予定なの？」

かがみ：「私は・・・そうねえ。ま、勉強したり、あんたと遊んだり本を読んだりかな」

こなた：「平凡な夏休みだねえ」

かがみ：「うるさいわね！」

つかさ：「（言えないっ。お昼近くまで寝て、あとはテレビを見たり、おねえちゃんに宿題を見てもらったりするくらいの夏休みなんて言えないよ）。聞かれたくないなあ（）」

（ちょうどその時教室に隣のクラスの男子が入ってきて、かがみがいるのを発見する）

生徒A：「お、いたいた。おゝい、柊、先生が呼んでるぞ（）」

かがみ：（時計を見てあわてる）「いけないっ、職員室にいかなきゃいけないんだった。みゆきもこのクラスの代表でいくんだよね？」

みゆき：「（時計を見る）」「ええ。そろそろ全校集会も始まりますし、私もちょうど職員室に行こうと思っていたんです」

こなた：「何かあるの？」

かがみ：（立ち上がりながら）「まあ色々だね。雑用を任されてるから。学級委員は面倒だからさ。じゃあみゆき、一緒に行こっか。二人とも、また後でね」

みゆき：「はい。それではお二人とも、失礼します」

こなた：「あいよ。いてら（ゆるゝく手を振る）」

つかさ：「いつてらっしやい（）」

第4話（前書き）

ちよつと百合百合した描写があります。
苦手な人は今回の話はパスしてください。

第4話

（かがみとみゆき、職員室へ向かう）

かがみ：（廊下を歩きながらみゆきと話をする）「ふう。すっかり忘れてたわ」

みゆき：（同意するように頷いて）「楽しい時間を過ごしていると、いつの間にか用事を忘れてたりしちゃいますよね。わかりますよ」

かがみ：（ニガ笑いを浮かべて）「あゝ、あの不毛な会話が楽しい時間っていうと語弊があるかもしれないけどね・・・でもみゆきってさ、しっかりしてるよね」

みゆき：（照れたように）「そうでもないですよ。わたしなんかは全然しっかりしてないですよ。お恥ずかしながら」

かがみ：「いや、しっかりしてるって。夏休みに入る前なのにちゃんと計画も立ててるし・・・。（廊下を見回し、誰もいないことを確認する）っていうかさ、夏休み、私に会ってくれないの？」（そういつて、みゆきの手を握り、立ち止まる）

みゆき：「え？かがみさん？・・・」

かがみ：（頬を上気させて、潤んだ目で）「みゆき、わたしキスしたいかも」

みゆき：（困惑して）「えっ・・・ほかの生徒がくるかもしれないですよ」

かがみ：（値踏みをするような目つきで）「ふーん・・・人がこなければいいんだ・・・」

みゆき：「そういうわけじゃないですけど・・・急にどうしたんですか？・・・きゃっ」

かがみ：（みゆきの手を引いて、トイレに入る）「ここならだれも来ないわよ」

みゆき：（おろおろとして）「それはそうですけど、先生方が待ってますよ。時間もないですし・・・（壁に押し付けられる）」

かがみ：「（耳元で）10分くらいなら遅れたって構わないわよ・・・（軽くキスをする）嫌？」

みゆき：「（うつむいて）嫌じゃないですけど・・・急にどうされたんですか？」

かがみ：「明日から休みで、今日は授業もなくて全校集会で下校でしょ・・・。なんかうれしくて昂ぶってきたのかな。理由なんてそんなもの・・・それに『こなたさんたちとも遊びたい』っていったでしょ。なんでこなたの名前が出て、私の名前が出なかったのかすごく悲しかったんだから（ヤンデレっぽい目の色に変わっている）・・・チュッ、チュッ」

みゆき：「んっ・・・」

かがみ：「ふふ・・・すごくいい声。甘くて・・・声出したら人が来ちゃうんだったね。ごめんごめん・・・今日はお昼には終わるし、帰りはこなたたちと帰るから、帰ったらみゆきの家に行くね。続きはそこで・・・ね？」

みゆき：「わかりました・・・あの・・・職員室に・・・行きませんか・・・？」

かがみ：（携帯を取り出して時間を確認する）「そうね。もう10分くらい経つし、あんまり遅れちゃうと変だもんね」

みゆき：「ええ。そうですね」

かがみ：（につこりと）「さっ、行きましょ。職員室で先生が待ってるわよ」

みゆき：（表情を読み取るようにかがみの顔を見ながら）「かがみさん」

かがみ：「なに？」

みゆき：「私の思い違いかもしれませんが・・・朝、私がこなたさんとばかり話していたから、もしかして妬いちゃいました？だからこんなことしようと思ったんじゃないですか？」

かがみ：（明らかに動揺しながら）「そ、そんなこと、じゃない、そんなことにやいわよ。なにいつてるのよ」

みゆき：（につこり笑う）：「そうですか？でもなんか、しどろもどろになってません」

か？・（くすり、と笑う）そういう強がりなところがかわいいのかもしれないね」

かがみ：（恥ずかしくてちよっとうつむく）「もうっ。なに訳のわかんないこといつてるのよっ。早く行くわよ。先生が待ってるでしょっ」（そういつて早足で先に行こうとする）

第4話（後書き）

かがみとみゆきさんの絡みです。

この辺はなんとなくの妄想です。

すいません・・・

第5話

（かがみとみゆきが去った後の教室）

こなた：「いや、生徒会というか、学級委員というかああいう人たちは大変だねえ」

つかさ：（うなずく）「いろいろとやらないといけないからね」

こなた：「（机にぺたつと倒れ掛かって）私なんかは生徒会には興味はないんだけどね。面倒くさいしさ。何より夜遅くまで学校に残ったりしなくちゃいけないし。」

つかさ：「そうなたらこなちゃんアニメ見なくなるもんね」

こなた：「うん。（ふと思い出したように）そういえばさ、よくアニメとかに生徒会の役員が出てたりするじゃない」

つかさ：（困ったように）「そうなの？」

こなた：「うん。えーとね、フルメタもそうだし、極上生徒会、なんていうのもあったよね。舞HIMEだって生徒会の人たちが出てたし、最近のラノベだったらさ、生徒会の一存、なんていうのもあるよね」

つかさ：「こなちゃん詳しいね。そんなにあるんだ」

こなた：「やつぱり学園物のお話には生徒会っていうのは欠かせないものかねえ。生徒会があったほうが話が盛り上がるし、何よ

り生徒会に所属している登場人物がスパイスになるってこともよくあるしね」

つかさ：「どうなんだろうね」(にこにこしながら)

こなた：「どうなんだろうね・・・」(体を起こして腕を組んで考え込む)

(ふたりともしばらくの沈黙。こなたは話し終えたままの表情で、つかさはにこにこしたまま)

こなた、つかさ：「「ね」・・・」

(いい意味でぐだぐだで、話は途切れる)

(黒井先生が教室に入ってくる。みゆきは手にプリントをたくさん抱えている)

黒井先生：(教壇に立って教室を見回す)「みんなそろってるか？おらへんやつ、手え挙げてや」・・・よし、全員出席やな」
(いいながら、呵呵大笑する)

こなた：(先生、さすがにそのギャグは笑えないよ・・・っていうか、最後の日くらい、ちゃんと出席とろうよ・・・)

黒井先生：「なんや」みんな辛気臭い顔してからに・・・今日が終わったら明日から

夏休みや。若者は若者らしゅう、もつとぱーっと明るい顔しとかなあかんでえ・・・ってことで、いまから学年集会や。一応プリン

トやら配ってから体育館に集合になるんで、高良、配ってや〜」
（そういつて、みゆきにプリントを配るように目配せする）

こなた：（なんだか、みゆきさん、少し顔が赤いよね。熱でもあるのかな）

つかさ：（そうだね。ちょっと足元もおぼつかないし・・・）

みゆき：「はい。それでは配りますね。・・・っと・・・ととと・
」（転んでスカートの中が見える。クラスの視線を独り占めする）

こなた：（ぱんつはいてない!?!）

つかさ：（・・・あれ？目の錯覚？）

クラスの目が一瞬そこへ行つて、小さいざわめきが一瞬で静かになる。

こなた：（みゆきさんがノーパンな訳ないし・・・さすが歩く萌え要素のみゆきさん・・・こんなところでもパンツはいてない構図を見せてくれるとは・・・）

みゆき：（顔を真っ赤にして）「すみません、今から配りなおしますね」

黒井先生：（配り終えたのを確認して）「はっははは、高良はドジっ子属性やの〜。よし、みんな受け取ったな〜。それじゃいまから体育館にいくで〜」

第6話

（体育館に集合して、並ぶ）

こなた：「こういう時ってさ、誰か倒れるんだよね」

つかさ：「わかるわかる。よくあるよね」

こなた：「で、倒れるのは最近だと萌えキャラなんだよね」

つかさ：「それはわからないかも・・・」

こなた：（遠い目をしながら）「みゆきさん、倒れないかなあ・・・」

「

つかさ：（困ったように笑う）「ちょっとこなちゃん・・・」

こなた：（遠い目をしながら）「ぱんつはいてないのかなあ・・・」

つかさ：「（困ったように）こなちゃん・・・」

（なんだかんだで終業式はつつがなく終わる。そして教室へ戻った後、ホームルーム。

通信簿を配り、終了）

黒井：「よし、これにて終了や。みんな夏休み中に怪我をしたりしたらあかんで。何かあったら先生に連絡をすること。それじゃ、

全員解散」

（クラスの全員、席を立ち、がやがやとした教室になる）

こなた：（つかさとみゆきのところにいく。背伸びをする）「いや、終わったね」

つかさ：「うん、終わったね」

みゆき：「ええ、終わりましたね」

かがみ：（こなたのうしろから）「終わったわね」

こなた：「うおっ。かがみん、いつの間に後ろに」

つかさ：「あ、お姉ちゃん。ホームルーム終わったの？」

かがみ：（腕を組んで勝ち誇ったように）「ほんのさっきね。一緒に帰ろうと思ってさ。それに、あんたたちの通知表がどんなものだったか興味があるしね。みゆきはともかく、こなたはゲームとアニメばかりで、つかさは寝てばかりだったから気になってさ。こなた（意地悪そうに笑う）もしかしてオール1か？」

こなた：「むかつ。アニメのお馬鹿担当キャラじゃあるまいし。つかさはともかく、私はそんなに悪くないよっ」

つかさ：（目を丸くして）「ええっ。こなちゃんのくせに」

第7話

かがみ：「ふん、そこまで言うのなら、見せてもらなさいよ、あんたの通信簿」

こなた：（恥ずかしげにうつむき、両手で通信簿を持って）「これ、受け取ってくださいっ」

かがみ：「馬鹿。ラブレターじゃないんだから・・・（受け取る）どれどれ・・・（目を通す、そして眉をしかめる）・・・ていうか、あんたさ、誇らしげに見せるほどの成績じゃないわよ？」

こなた：「いやいや、これはこれでいいんだよ。一応5があるでしょ」

かがみ：「あるにはあるけど」

こなた：「それが大事なんだよ。これでお父さんにPSPを買ってもらえるからね。」

これより一個5が多いと、PS3になつてたんだよ。買ってもらったところであんまりいいゲームは出てないからね。ちなみにこれより一個少ないと、X BOX」

かがみ：「（突っ込む）お前はPSPのために成績を調節したのかっ」

こなた：「まあまあ、いいじゃない。それよりさ、かがみはどうな

の？見せてよ。．．．．てやつ（かがみから通信簿を奪い取る）ふん．．．（じつくりと眺めて）なかなかのものだね．．．

かがみ：「（勝ち誇ったように）ま、あんたとは違うわよね」

こなた：「でもみゆきさんほどじゃないね。みゆきさん、見せてあげてよ」

みゆき：「え？わたくしですか？どうぞ（かがみに遠慮がちに手渡す）」

かがみ：「（こなたのときとちがい、じつくりと見ていく）」．．．へえ、さすがみゆきね」

みゆき：「顔を赤くしながら）「そんなことはありませんよ」

かがみ：「（両手を腰に当てて、胸を張りながら）さすがでしょ。やっぱりみゆきさんはすごいよねえ」

かがみ：「（みゆきの通信簿から目を離し、こなたを呆れた様子で見ながら）「どうしてお前が誇らしげに言うんだ．．．」

つかさ：「え、ゆきちゃん、すごいのか？．．．私にも見せて見せて（かがみから通信簿を受け取る）．．．わあ、５しかないね．．．お姉ちゃんも．．．すごいね。ほとんど５だ」

かがみ：「まあ、たいしたことはないわよ。で、あんたはどうなの、つかさ」

第8話

つかさ：（両手を胸の前で振りながら）「ええっ？私ほら、お姉ちゃんと違ってマイペースだから。あまり勉強もしてないし。だからあんまり良くないよ。えへへへへ。（困ったように笑う）」

かがみ：「そうよね。こないだのテスト期間中も、夜、私がトイレに降りて行ったら、台所の明かりがついてて、冷蔵庫を漁ってるつかさの姿をみるのはしょっちゅうだったわ。『たこわさ、たこわさ』なんていいながらさ」

つかさ：「（真っ赤になつて）ええ。それは、あの、お姉ちゃんがテスト勉強で疲れないように、なにか夜食でもないかななんて思ってた……。それに、なんかほら、夜更かしってなんか楽しいからね。ついつい部屋の中をうろろしたりして、勉強がおろそかに……。えへへへ」

かがみ：「（やれやれ、といった仕草）苦しい言い訳ね。ま、もつとも、つかさの作ってくれた夜食は結構美味しかったけどね」

つかさ：「（焦り気味に）でしょ、でしょ」

かがみ：「（素にもどり）それはいいから、通信簿見せなさい」

つかさ：（泣きそうな顔で）「見せないと駄目？」

かがみ：（やれやれといった表情で）「家に帰ったらどうせ判るんだから。ほら、見せなさい。（つかさの通信簿を奪い取る。つかさ、しょんぼりとした様子になる）……。どれどれ……。家庭科はいい

わね・・・あとは・・・はあ。（ため息をつきながら通信簿を返す）
・・・だからいったじゃない。ちゃんと勉強しとかないと酷い成績
になるって」

つかさ：「（うなだれて）そうだね、ごめんなさい」

かがみ：「（首を振って）まあいいわ。次の学期は私がちゃんと勉強
教えてあげるから」

つかさ：「うれしそうに顔を上げる」「本当？ありがとっ、お姉ち
ゃん」

かがみ：「照れくさそうに」「あんたもしっかりついてくるのよ」

つかさ：「うん、私頑張るねっ」

かがみ：「頑張んなさいよっ（にっこり笑う）」

こなた：「黙って笑いながらかがみをじっと見る」

かがみ：「視線に気づく」「何かいいたそうだな」

こなた：「いやゝ、やはり姉妹仲がいいですなゝ」

かがみ：「普通よ普通」

こなた：「あと、テスト期間中に体重を気にすることが多いなゝと
思ったらそういう理由があっただなゝって。なんだかんだ言っ
て結構食べてますなゝ。夜食は太るよゝ」

かがみ：「うっさいわねっ！喧嘩売ってんのかっ」

第9話

こなた：「（きゃー、と逃げる仕草をしながら）おー、怖いねえ・
・・ところでみゆきさんはいつも11時には寝るみたいだけど、テ
スト期間中も同じ時間に寝るの？」

みゆき：「そうですね。私は基本的にそんなに遅くまでは起きられ
ませんので・・・。

その代わりといっでは何ですが朝少し早起きをして勉強をしますね」

こなた：「（感心したように）へー。朝の勉強なんて考えられないよ。
夜中までネットゲやったり深夜アニメ見てたら朝はぎりぎりまで寝な
いと眠たいよ」

かがみ：「すばやく突っ込む」「ちよつと待て。試験期間中の話だ
ろつ。勉強はどこに行っただ」

こなた：「（必死に取り繕う）」「もちろんやるよ。勉強の合間にネト
ゲとかアニメ見てるだけだもん。夜型だからちよつとその辺活発に
なるだけだもん」

みゆき：「そうですね。確かに夜型の人には、朝はつらいですか
ね」

かがみ：「こなたって、頭ぼつさぼさの日もあるしねー。ぎりぎり
まで寝てるんでしょうけど。女にとって髪は大切なんだからね。ぼ
さぼさの髪の美人より、髪のきれいな普通な女の子のほうが男受け
だっていいんだから」

こなた：「私はそこまでは気にしてないから。バイトの時はちゃんとすればいいし。かがみは男受けしたいって思ってるの？」

かがみ：「そりゃねえ。でも今はまあいいかな。」（ちらっとみゆきを見る。みゆき、にこつと笑う）

こなた：「まあ、これから夏休みだしね。恋の一つや二つしてみてもいいかもね」

かがみ：「（からかうように）あんたはずっと部屋に閉じこもるでしょうから、そういう機会なんてないんじゃない？」

こなた：「さあ、どうだろうねえ」（思わせぶりに言う）「

第10話

かがみ：「（すごくびっくりして）まさかそういう相手がいるのか！？」

つかさ：（ええっ、そんなっ、こなちゃんのくせに）

こなた：「いや、いないけどさ。でも恋愛なんてネットゲームでもできるじゃん」（その発言を聞いて、つかさ、ほっとする）

かがみ：（ドン引きして）「完っ璧にあんたの世界の側の人間の発言だわ。それ」

こなた：「いやいや、最近はミクシイとか、モバゲとかほかにもネットゲームでもそうだけど、実際にオフ会とかで会ってそのまま付き合ってゴールイン、っていうのもよくある話だよ」

つかさ：「（頷いて）あ、私も聞いたことあるよ。そういうことがあるんだってね」

かがみ：「ふん」

こなた：「まあ、機会があればかがみもやってみたらいいよ。それよりさ、早く帰ろうよ」

つかさ：「そだね」

かがみ：「そうするか」

みゆき：「そうですね」

（4人で学校の外に出る。外は晴天。下校する生徒たちも多い時間帯。）

かがみ：（空を見上げて）「しかし暑いわね」

こなた：「まあ、夏だしね。日差しが強烈だよね」（手をかざし、目を細めながら太陽を見る）

みゆき：「わたしは肌が弱いので、あまり強い日差しは苦手なんです」

つかさ：「あゝ、みゆきさんそんな感じがするよ」

こなた：「みゆきさんはお嬢様だからねえ。そうだ。ちょっとコンビニによってもいい？」

かがみ：「いいけど」（全員うなづく）

（4人、コンビニに入る）

つかさ：（目をつぶって、制服をつまみ、ぱたぱたさせる。）「うわゝ、涼しいね」

みゆき：「うれしそうに」「本当ですね」

こなた：「（そんな様子を見た後）ちょっと待っててね」

かがみ：「（立ち読み用にTVガイドを手に取り、目を通しながら）何、雑誌でも買うの？」

こなた：「違うよ。ウェブマナーだよ」

かがみ：「ウェブマナー？」

第11話

こなた：「そうそう。ネット上で使えるお金だね。ネットで買い物するときにこれで支払いするんだよ」

かがみ：「あんた、ネットで何か買い物するの？」

こなた：「うん。ネットゲームのアイテムだよ」

かがみ：「アイテム？」

こなた：「そう。今日から夏休みでしょ。ネットゲームの運営会社も稼ぎ時みたいでさ、色々

とサービスしてくるんだけどその中に経験値が2倍とドロップアイテムが2倍になるサービスがあるんだよ。そのアイテムを持っていれば、なんと経験とドロップが2倍になるんだよ。まあ、効果は3日だけだけどね」

かがみ：「へー。じゃあその3日間はあるだけゲームしたほうがいろいろいいってことね。あんたにぴったりのアイテムじゃない」

こなた：「そう。だから私は今日から3日徹夜するつもりなんだよね」

かがみ：「ちょっ！あんたね、なに馬鹿なこといつてんのよ。体壊しちゃうでしょう！」

こなた：「いいや。前も3徹したことあるけどだいじょうぶだった

よ。・・・ただ、4日目は

丸々24時間寝てみたいで、起きたら5日目になつてたけどね」

かがみ：「（苦笑いして）ああ・・・あのときか。3徹目のあんたの顔、相当ひどかったけどね。」

こなた：「まあ、夏休みだし、誰にも会わないし、多少ひどい顔になつても大丈夫かなつて」

つかさ：「でも、いくらなんでもそれはきついよ。なんかテレビのニュースでも

ゲームで何日も起きてて死んだ、つて言う人の話も聞いたことがあるし・・・やめたほうがいいんじゃない？」

みゆき：「そうですよ。皆さんの言うとおりです。そもそも人間の体は寝ている間に疲れをとるようにできています。それから寝ることによるストレスの解消などもありますね。そして生活リズムの形成にも睡眠は役立っています。同じような時間に寝て同じような時間に起きる。というリズムですね。食欲、性欲、睡眠欲は基本的な欲求です。無理して3日徹夜して、その後体を壊して、2週間寝込みましたということもありうる話ですよ。そうになると、せつかくの夏休みを無駄にすごしてしまうことになりませんか？体も壊して高校最後の夏休みも無駄に過ごしたでは悔やんでも悔やみきれないですよ。」

こなた：「（汗をかきながら）ううっ。みゆきさんが言うと言得力があるねえ。それはわかるんだけど、3日間限定のアイテムだから、ちよつとでも使っておきたいしなあ」

かがみ：（呆れ顔で）「あんたさあ、そんなに経験とかレアアイテ

ムがほしいの？」

こなた：（そんな風に聞かれること自体想定していなかったといわんばかりの

意外そうな顔で）「当たり前じゃん。他の人が持っていないアイテムをゲットできるんだよ。（顔を近づける）レベルが高くなれば、今までいけなかったエリアにもいけるんだよ。（さらに顔を近づける）周りからもうらやましがられるんだよ。（さらにry）それを装備している人は鯖に自分しかいない、というふうになるかもしれないんだよ。（さry）そのうえ、強くなるから殲滅速度も上昇するんだよ。（ry）Tプレイになったら絶対に役立つじゃない。それは欲しくなるよっ」

第12話

かがみ：「ちよっ、わかつたから、そんなに近づくなっ。」

こなた：「むらっと来た？」

かがみ：「来るかつ。私にはネトゲはわからないけど数字の増え方が大きくなるだけでしょ。そんなことで一喜一憂するなんて私にはわからないわね。」

こなた：（ちよっとからかうような表情を作る）「そうだろうけど、かがみんだって体重の増減で一喜一憂してるじゃん。数字だよ。体重だつて。」

かがみ：「・・・ううっ。痛いところをつくな。とにかく・・・3徹なんて体に悪いんだし、あんたが倒れたりしたら私たちも迷惑するでしょ。お見舞いに行ったりとか。みんなで遊びにいくはずがいけなくなったりとか。だから無茶はしちゃだめだからね」

こなた：「ああ、今のせりふ、惜しいなあ。微妙にツンデレな感じ。・・・みんなに心配をかけるようなことはしないよ。」

つかさ：「本当だよ。」

みゆき：「お願いしますね。」

こなた：「ああ。こんなにいい友達を持って、私はなんて幸せ者なんだろう。・・・ってことでウェブマネー1000円分だけ買ってくるね。今日だけ徹夜で我慢するよ。」

かがみ：「（突っ込む）徹夜はするの catt」

こなた：（レジで支払いをすます）「おまたせっ。じゃあ行こうか。みんなはどこかよらなくていいの？」

かがみ：「私は大丈夫」

つかさ：「大丈夫だよ」

みゆき：「特にはないですよ」

こなた：「よし。じゃあ帰ろう。」

（涼しいコンビニから、一気に外の暑さに戻る）

こなた、かがみ、つかさ、みゆき：「……暑いね」「暑い……暑いね」「暑いね」「暑いですね」

（バスに乗る。それぞれが最寄の場所で降りていく。こなたも家に到着）

こなた：「ただいま」（リビングへ行く）はあ、涼しい」

そうじろう：「お、お帰り」

ゆいねえさん：「こなたあ、おつかえり」（手にはビールの缶を持っている）

こなた：「ただいま。あれ、来てたんだ。仕事はどうしたの？て

か、昼間からお酒ですか、

ゆいねえさん……」

ゆいねえさん：「今日は有給をとってるから休みだよ。休みくらい飲ませてよ。」

こなた、今日から休みなんでしょう？」

こなた：「そだよ」

ゆいねえさん：「学生はいいね。(駄々をこねるように) 私も気楽なあのころに戻りたいよ。(ビールをぐいっと飲む) ぷふあゝゝゝっ、うまいっ!!」

こなた：(呆れ顔で)「ゆいねえさんを見てたら、社会人のほうが気楽に見えるよ……」

ゆいねえさん：(焦り気味に)「そんなことないよ。社会人は大変なんだから。」

そうじろう：(うなづいて)「そうだぞ、こなた。社会人は大変だ。早く社会人になりたいなんていわず、学校生活を楽しむんだぞ。お父さんはな、こなたの制服姿をいつまでも見ていたいんだよ。それからこなたの友達が制服で来るのを見るのも楽しみなんだからな。」

ゆいねえさん：「あ……警察官の前でそういう危険な発言はやめてくれませんか……？」

第13話

そうじろう：（汗・・・話を変える）「そっぴゃこなた、通知表を」

こなた：（思い出したようにかばんから取り出す）：「そっぴゃだっ
ね。今回は頑張ったよ」

そうじろう：「どれどれ・・・なるほど・・・1、2、3・・・
と。これはPSPだったな。（こなたうなづく。）よし、約束だ。
わかった」

こなた：（両手をあげて喜んで）「やった」

そうじろう：（それを見て満足げに）「それじゃ今から買いに行く
か。お父さんもPSPはやりたいゲームがあるんだよ。こなたと一
緒にな。（照れた様に鼻をかく）」

ゆいねえさん：「もしかして最近CMでよくやってる、モンスター
をハンターが倒していくゲーム？」

そうじろう：「そう。モンスターをハンターが倒すゲームだな。面
白そうできー。こなたとやりたいんよ」

こなた：「あー。モンスターをハンターが倒すゲーム、やりたいけ
ど今日は今からネットゲー

ムをやらなくちゃいけないから。明日行こうよ。」

そうじろう：（残念そうに）：「そっぴゃなのか？じゃあ明日だな。」

こなた：「うん。わたしお風呂入ってくるね」(リビングから出る)

そうじろう：「ああ、わかった。(こなたを見送りながら腕を組む)・・・うん、後姿まで亡き妻に似てきたなあ。」

ゆいねえさん：「そうだね。」

そうじろう：「あいつとはよく一緒に風呂に入ったりもしたなあ。

こなたと一緒に風呂に入りたいくらいだ。」

ゆいねえさん：(またか、という顔で)「あの～。警察官の前で度々の問題発言は謹んでよ。それより、旦那がねえ・・・(単身赴任でなかなかあえない旦那との話を再びやりだす。うんざりしながらも聞くそうじろう)って、聞いてる?」

そうじろう：「すまんすまん・・・ゲームのことで頭ん中がパンパンだった。」

(こなた、風呂でシャワーを浴びて出てくる。短パンと大きな目のTシャツという姿。)

こなた：(ぬれた髪の毛をバスタオルで拭きながら台所へ入る)「いや～。すっきりした。」

ゆたか：「あ、お姉ちゃん。お風呂上がったの?」(台所でお菓子を食べている)

こなた：「あれ、ゆたかちゃん、帰ってたんだ。ちよつとすつきりしてネットゲでもやるうかと思つてさ。ゆたかちゃんもやる？」

ゆたか：（にこにこして）「私はそういうの良くわからないから・・・。お姉ちゃん、頑張つてね！（キラキラとした笑顔）」

こなた：「頑張るよつ・・・（しゅたつ、とキメポーズをしたあと、ジューズを冷蔵庫から出して）それじゃあいつてくるね。（逃げ出すように）」

ゆたか：（名残惜しそうに）「いつてらっしやい」

こなた：（2階へあがりながら）「・・・ある意味駄目人間の時間つぶしのネットゲなのに、あんなきらきらした目で『頑張つてね！』なんていわれちゃったらお姉ちゃん、あの場所から逃げ出すしかないじゃない・・・」（ちよつとなみだ目で、ぐいつとジューズを飲む）

第14話

（部屋に到着）

こなた：（パソコンの前に座る）「さて、早速はじめるかね。・・・ログインしてと・・・」

（サーバーに接続できません、というメッセージが出る。2度、3度繰り返すが、結果は同じ。）あれ？もしかして・・・臨時メンテナンスってやつか？ちよつとちよつと・・・。」

（2chのゲームスレをチェックする）

こなた：（どうやらメンテみたいだね・・・みんな怒ってるみたいだね・・・夏休みの初日から緊急メンテですか・・・糞運営、ご苦労です・・・もうこのゲーム引退しますね・・・色々書いてあるね・・・みんな怒ってるね）。まあ、引退する、って書き込みしてる人が引退することなんてないけどね）

（こなた、メッセージが来ていることに気づく）

こなた：これはこのゲームと一緒に狩をよくする『ホンだし』さんじゃん。

ホンだし：「ちーす」

こな：「ちゃ」

ホンだし：「帰ってたんだ。」

こな：「今日から夏休みだしね。」

ホンだし：「うむ。つかメンテだな。」

こな：「いつまであるんだろ？」

ホンだし：「さあ。夏休みになったら人が増えるくらい誰でもわかるだろうに。」

ホンだし：「駄目運営だな。」

こな：「本当だね。今日から経験ドロップ2倍なのに。」

ホンだし：「そうだな。ドロップ2倍ということは、これでこなに会うことができるかもというわけだな。」

こな：「またその話wまあ、せいぜい頑張つてよw」

ホンだし：「頑張るも何も、運次第だしな。もう一回聞くけど、俺がラク剣ドロップしこなにプレゼントしたら、リアルで会ってデートできるんだな。」

こな：「まあ、そのときに気が向いたらね。つか、私がリアル男かも知れないのに。」

ホンだし：「それでもいいし。お前とは話が合うからな。復唱要求

っ！『ラク剣を

ドロップしてプレゼントしたら、ホンだしにリアルで会います。』
だっ！」

こな：「うみねこネタかwいいでしょう。赤で答えるよ。うそじゃないから。ラク剣を

ドロップしてプレゼントしたら、ホンだしにリアルで会います。（黒い文字ですが、実際は赤で答えています。）これでいい？」

ホンだし：「ふふふ。どうやらノリに引かかって、勢いで赤で答えてしまったみたいだな。って、おおおおおおおおおっ」

こな：「どうした？」

ホンだし：「ログインできたわ。」

こな：「うはwおkwwwwwwww」

ホンだし：「んじゃゲームでノシ」

こな：「あいお」

こなた：「やっとログインできるか・・・。」

（こなた、ゲームにログインする。）

第15話

(こなた、ゲームにログインする。)

こな：(クラメンに挨拶する)

クラメンA、B、C、D、E、F、G：「おす」「ちや」「ちや」
「こん」「ちや」。

・)「こん」「こんちわ」

こな：「おおつ、今日はみんな結構インしてるね。街も人が多いし。」

クラメンA：「経験2倍だしね」

クラメンB：「蔵半も行きたいね」

ホンだし：「ノ」

こな：「ノ」

(その他クラメン「ちす」とか「ノ」とか)

こな：「うし。ちとホンさんと狩行ってくるよ。」

クラメンD：「ラク剣？」

こな：「だね。」

クラメンE：「あゝ、さっきいったけど張り付いてる人多かったよ。」

ホンだし：「まだ鯖で持つてる人いないし、そのうえ時間沸きだからなあ」

こな：「まあ一回試してみようw」

クラメンC：「権利争いあついろw」

こな：「晒しに会わない程度にやってくるわw」

クラメン全員：「てらゝ」

（こなとホンだし、待ち合わせて、時間沸きボス部屋付近に到着）

ホンだし：「ドロップ2倍アイテム買った？」

こな：「今アイテムモール開いてる、・・・買ったw」

ホンだし：「おkwnじゃ行きますかwww」

こな：「後どのくらいで沸く？」

ホンだし：「あゝ、リアルであと10分だな。ちっと飲み物取ってくるわ」

こな：「同じく」

（こなた、一階へ降りて台所からお菓子を取ってくる。再びゆたかから、がんばってね！と笑顔で言われ、なんとも言えない気持ちになりながら、2階へ）

ホンだし：「おk？」

こな：「おk」

（ボス部屋へすすむ。ボス部屋で待機しているプレイヤーはいつもの2～3倍の人数）

こな：「www」

ホンだし「なにこれww」

こな：「こりや大変だねw権利取れるかな」

ホンだし：「わかんね。無理かもな。あのへんとか、有名キャラいるじゃんw」

こな：「神火力とINT神だねww厳しいな」

ホンだし：「まあ、こんなこともあるかと、一応火力upと速度up買ってるから」

こな：「なるほどwんじゃヒールは任せてね」

ホンだし：「よろwそろそろか・・・」

（リアルでちょうどこの時間。ボス、出る。こなとホンだしのいる辺りに沸く。そのため、ほかのキャラより早くボスを削り始める）

こなた：「ちょwこりや幸先いいしw」（左クリック連打。機を見てヒール。攻撃うp魔法等をホンだしにかける。）

こなた：「なんか、いい感じかも・・・ボスがホンだしさんをタゲったままってことは、

一番ダメ与えてるってことだし・・・ヒール間に合わない・・・っ！！」

（そのとき、ホンだしにヒールをかけるマジシャンが出る）

こなた：「あれは・・・黒井先生のキャラっ！！・・・助かる」

黒井先生のキャラ：「（内緒をこなたのキャラに送る）なんや、泉。早速夏休み初日からゲ

ームかいな。色気も何もないやつちゃのww（といいながらヒール、ヒール）」

こな：「（ヒールが忙しくてあまり打てず）まあ、そんなところですw（画面の前で、つか、

先生も初日からゲームじゃないですか、人のこと言えないですよ、と突っ込む）」

（20分後、ボスを倒す。ドロップがこな、とホンだしに大量に降ってくる。）

ホンだし：「どろっぷww」

こな：「うあww」

（8種類くらいのドロップアイテムが降ってくる。そのなかにラク
剣がでる）

ホンだし：「いやったああああああああっ」

こな：「うそ！！！！！」

（クラメンに報告。AA大量のお祝い）

クラメンA：「情報サイトに0,0000000000000001%の
確率でしか出ない、って書いてたよな。」

クラメンB：「そりやそうだろ。装備効果は・・・攻撃力50%、
魔法効果50%up、
クリティカル率85%up・・・」

クラメンC：「ありえんw」

クラメンB：「まだあるしw。攻撃速度50%up、HP増加+5
00・・・wwあと、これを装備している間だけ使えるスキルがあ
るみたい。MP半分使うけど、回避が3倍だってwww」

ホンだし：「すごいのがゲットしたわ・・・」

（ホンだし、トレード画面を開いて、こなに渡す）

こな：「もらっていいの？」

ホンだし：（内緒を送る）「その代わり、ちゃんと約束まもってくれる？リアルで遊ぶって言うことね。」

こな：「うーん・・・」（PCの前で腕を組む。しばらくして）判った。」

ホンだし：「じゃあ、明日でいい？」

こな：「明日？」

ホンだし：「朝10時から」

こな：「場所がわからないし」

ホンだし：「春日部駅はどう？」

こな：「あゝそこなら判るよ。もしかして関東の人？」

ホンだし：「そうだね。」（そういつてトレードを完了する）

こな：（しばらく考える）「わかった。じゃあ明日、10時、春日部駅で。一応携帯も教えておくね。」

第16話

こなた：「そういえば黒井先生にお礼を言ってなかったな。よし、内緒を送ろう・・・先生、ありがとうございます。おかげでレアもゲットできたし、死ななくてすみしました。先生、今どこ？」と

黒井先生：「（しばらくして）うちはいまクランのメンバーと一緒に狩や。」

こなた：「さっき言いたかったんですけど、先生もせっかくの夏休み初日から何やってるんですか。色気も何もないですね、と。（送信する）」

黒井先生：「・・・どうやら夏休み明け、泉だけ課題をたくさん出さないかんようやな。自分だけレアゲットしてからに」

こなた：「かんべんっ」

（その後はレアゲット記念のクラハン、圧倒的攻撃力と速さでメンバーの経験値もたまりまくる。）

こな：「もう0時か。明日ちょっと早いんで寝るね」

クラメン：「おやすみ」

（翌日。晴天。こなた、リビングに降りる。）

こなた：「あ、お父さん、おはよう」

そうじろう：（マンガから顔を上げる）「お、こなた、おはよう。夏休みなのにはやいな。さ

ては早速一緒にPSPを買いに行きたくなったか。お父さんはいつでも準備okだぞっ！」

こなた：「いや、それがさ、今日買いに行こうと思ってただけど、友達と遊ぶ約束が出来ちゃってさ。ごめんね。お父さん。」

そうじろう：（がっかりした様子で）「そうか。仕方がないな。あれだろ？いつもの双子の・・・」

こなた：「いいや。今日は男の子と遊んでくるね」

そうじろう：「（大きく頷く）そうかそうか・・・男の子か・・・ん？男だとお・・・？（マンガをテーブルに落とす）のおお」

こなた：「だから言いたく無かったんだよ。（ちょっと迷惑そうに）そんなに心配しなくていいよ。ただの友達だし。」

そうじろう：「（あせる）しかしだな、大事な一人娘が俺の知らない男と一緒に遊ぶのを心配しないわけにはいかないだろう。一体どういう男なんだ？」

こなた：「（ため息をつく）別に普通の子だから。心配しないでいいからね。あ、そろそろ時間だ。いってくるね」（玄関へ向かう。）

そうじろう：「（立ち上がって手を伸ばす）ちょっとまで、こなた・
・こなた~~~~~っ（両膝をがつくりとつく。彼の周りの空気が真っ黒になる）」

ゆいねえさん：「（目をこすりながら）おはよう・・・朝から一体
どうしたの？大声出して」

そうじろう：「（ゆっくり顔を上げる。涙を流している。）ああ、
ゆいちゃん・・・こなたが、こなたが俺の手を離れていってしまったよ・・・」

ゆいねえさん：「（がつくりとうなだれているそうじろうの肩に手をかけて、ビールの缶を目の前に差し出す）・・・付き合っよ。今日はとことん。休みとってるし」

そうじろう：「うわああああああんっ（ゆいねえさんの胸で泣く）」

（外。暑さはそれほどでもない絶好のデート日和。こなたは、駅でホンだしがくるのを待つ。格好は短パンにＴシャツと帽子。メールでどんな格好で来るかは知らせているが、なかなか来ない。）

第17話

こなた：（時計を見ながら）「うん。そろそろ時間なんだけどなあ。」

ホンだし：（こなたの背後から声をかける）「えーと、もしかしてこな？」

こなた：（振り返る）「うん、ホンだしさん？」

ホンだし：「うん。俺がホンだしです。（にこりとする）」

こなた：「おお。予想したよりぜんぜんかっこいいじゃん。いつもネトゲにインしている

から、正直ピザニートかと思ってたよ。（しげしげと見つめる。）「

ホンだし：「なに言ってるんだよ。（照れる）俺、一応社会人だから。今日は土曜日だからね。」

こなた：「へへ。そうなんだ。（そういつて隣にいつてしがみつく）身長どのくらい？」

ホンだし：「180ちょいかな。」

こなた：「うちのおとうさんと同じくらいか。高いね。」

ホンだし：「こなは低いね。どのくらい？」

こなた：「（しがみついたまま、見上げて）143だね。つむじが

みえるんじゃない？」

ホンだし：「お父さんは背が高いのにね」

こなた：「お母さんが低かったからね。あんまり身長のこととは聞かないですよ。」

ホンだし：「あゝ、悪かった。体のことはあんまり言っちゃダメだね。胸がないとかさ」

こなた：「それは別にいいよ。（握りこぶしを作り）あえて言おう。貧乳はステータスであると！」

ホンだし：「（しばらく考える）まあ確かにそうかもしれないな。」

こなた：「うゝん、あれだけ会いたがってたのに、実際あつたら意外と静かだね！」

もしかして私にがつかりしたとか？」

ホンだし：「え？いやいや、なんというか実際に会うとなかなかうまく話ができないというか、人見知りでさ。本当はジーク！貧乳！ジーク！貧乳！、位のことは言いたいんだけどね。」

こなた：（たくらみのあるような顔で笑う）「言ってるじゃん！人見知りだなんて前置きをしておきながら、普通に言ってるし……。でも、なかなか打ち解けるのが難しくて困ってるんです。ということ？旦那、そういう時は、共通の趣味ですぜ。」

ホンだし：（なるほど、と納得がいった顔になる）「そうだね。ちよっとアニメイトと、メロンブックスに行かない？それからそれほ

ど大きくはないけど、近くで同人の即売イベントがあるんだわ。」

こなた：「へ」。それは知らなかった。まずそれ行こうよっ（手を引っ張る）」

ホンだし：「ととと・・・そんなに急がなくても、逃げたりはしないって」

こなた：「（振り向いて人差し指を振る）ちっちっちっ。規模が小さくても同人誌即売は早い者勝ちだよっ」

（二人、同人会場へ。その後、それぞれのお店で雑誌を見たり、どの絵師がいい、とかこのマンガがいいアニメがいい、という風に盛り上がる。あとはこなたが持ってきたMP3プレイヤーを公園で座って二人で聞いたりする。基本はニコニコ組曲やアニソン。それからゲーセンへ遊びにいくというパターン）

（楽しい時間はあっという間にすぎ、時間は夕方6時。ゲームセンターに入る。夏休みということもあってかなり人が多い。二格闘対戦のところへ行く）

第18話

こなた：「（百円をピンと弾き、キャッチしながら）私、格闘ゲームが得意だから、ちょっとやってみていい？」

ホンだし：「俺も結構得意だよ。」

こなた：「ほうほう。んじゃちょっと対戦してみようか。（こなた、対戦台へ座る）」

ホンだし：「いいけど、ただ戦うだけじゃ面白くないな。こなが負けたら今日、家に泊るっていうのはどう？」

こなた：「え〜？いやらし〜。（それほど嫌がらず）んじゃ、わたしが勝ったら？」

ホンだし：「そうだなあ・・・こな、何かほしいものある？」

こなた：「（間髪入れず答える）昨日出たエロゲかな。初回限定版のフィギュアがなんと海洋堂がつくったやつだね。ヒロインのなんだけど、ものすごく出来がいいんだよ。今回するのは続編なんだけど、前作でも一番人気があったキャラなんじゃないかな。でもその分結構高いよ？本当に大丈夫？」

ホンだし：「構わん」（ゲンドウ風に言う）

こなた：「じゃあやろうつ。エロゲ頂きますっ。」

（こなたが対戦台に座ると、ギャラリーがわらわらと集まってくる）

ギャラリーA：「おい、あの女の子・・・」

ギャラリーB：「おお、久しぶりにきたんだ。伝説のゲーマー少女Aだ・・・」

ギャラリーA：「すごいよな。あの子。相当このゲームをやり込んでいるはずだよ。（腕を組んで真剣に画面に見入る）なにしろ、今このゲームでできるキャラのコンボはほとんどこの子が編み出したようなものだからな。みんなそれを真似して、広がって行ったんだよ。」

ギャラリーB：「それはすごいな。ってことは、今日はもしかして・・・（ゴクリ）」

ギャラリーA：「ああ。新しいコンボが見れるかもしれないな。一応携帯動画に取っておくか・・・ニコニコに流そう」

ホンだし：（ギャラリーの声に耳を傾ける）「マジでか！・・・てことは勝てるわけがねえな・・・なにしろ俺のコンボは全部人の真似だしな・・・だから自信満々だったのか・・・」

第19話

（その後、対戦スタート。ホンだしも格闘ゲーム好きらしく、確実にコンボを決めていく。しかし、一日の長がこなたにあり、2セットとられる。）

ホンだし：「なんとなくパターンは読めてきた。ただ、画面端に押し付けられるとちょっと厳しいな。（なんとかタイミングをずらしたり、ガードをしつかりして、2セット取り返す）よし・・・いけるかも知れんな。」

こなた：「（ちょっとあせるが、久々に手こたえのある対戦で興奮する）思ったよりやるね」。新しいコンボを試してみるかな。これはちょっとハメっぱいから、こういうところでやりたくはなかったんだけど・・・」

（ラストバトルスタート。こなたのキャラが浮かせを使った後、コンボの連打。ホンだしのゲージを9割削る。ギャラリ、初めて見る超絶コンボに沸く。その後、勝負はこなたの勝ち。）

こなた：「よっしゃー！（対戦者が入ってくるが、放置して荷物を持ち、立ち上る。）いやー。意外とやるんだね。まさかこの私をここまで追い詰める者がいようとは」

ホンだし：（しょんぼりと）「でも負けたしね・・・こなを家に泊めたかったな・・・ああ、悔しい。（思い立って）よし、ラーメン食べにいく」

こなた：「ラーメン？」

ホンだし：「そう、悔しいときはラーメンだろ。俺がおごるから。」

こなた：「悔しいときはラーメンって、初めて聞いたよ（笑う）」

ホンだし：「そうかなあ・・・（落ち込む）」

こなた：（かわいそうに思える）「そんなに落ち込まないでさ。でも悔しいときはラーメンって・・・なんかツボに入ったよ・・・仕方ない。今日は一緒にいてあげるよ。」

ホンだし：「マジで！」

こなた：「（仕方ない、といった風に）マジだよ。私もホンだしさんという話して悪い人じゃないって言うのはわかったし・・・その代わり、えっちなことはなしだからね。」

ホンだし：「もちろん。えっちなのはいけないと思います。だからね。」

こなた：「うんうん。わかってるね。もし手を出したら（人差し指を立てて、恐ろし

げな顔をする）・・・死ぬよ。」

ホンだし：「（梅図かずおのタッチっぽく）ひいひいひい」

こなた：「約束はちゃんと守ること」

ホンだし：「約束？エッチなことはしないよ。」

こなた：「（いやいや、と手を左右に振る）そっちじゃなくて、初回限定のほう。（キラッと目が光る）まだゲームシヨップ開いてるし。」

ホンだし：「・・・さすがだわ（財布の中を確認する）」

（ゲームを購入しにゲームショップへ。二人でエロゲコーナーへいく）

こなた：「これこれ・・・やっぱり人気があるんだねえ。ほら、一番目立つところで平積みされてるよ。（手に取ってしばらく眺める）・・・いや、いい仕事してるよね」

ホンだし：「（平気な顔をしてエロゲを手に取るこなたに小声で）こなは恥ずかしくないの？」

こなた：「（質問の意味がわからずに、エロゲから目を離し、ホンだしに目を向ける。）え？何が？」

ホンだし：「いや、こういうところって女の子はほとんど来ないし、ゲームの内容がエロだし・・・」

こなた：「（さえぎって）みなまで言うな・・・（真剣にホンだしを見つめる）・・・萌えを追求し、自分の好きなものを獲得するためなら、どんな場所でも平気なんだよ。それが男の生きる道ってやつさ。（ホンだし、女だろ、と突っ込むがこなたは無視する）・・・というわけで、これ。買うから。ポイントカードも持ってるからお金だけ頂戴。（そういつて手を出す。）」

ホンだし：「筋金入りとはこのことだな・・・（つぶやいて、お金を渡す。こなた、軽い足取りでレジへ行く。）」

第20話

（ゲームショップを出る外はちょっと暗くなっている）

ホンだし：「こなが来るっていうことだから、ラーメンはパスだな。ご飯は自炊してるから、家で食べようか？料理は作るよ。」

こなた：「それは楽しみつ。今日は楽しかったな。同人誌も買ってもらったし、マンガも買ってもらったし、ゲームもゲットしたし、ホンだしさんは優しい人なんだね。」

ホンだし：「こなこそ、わざわざ来てくれるなんて、うれしいよ。」

（二人、電車に乗って30分ほどで最寄の駅に着く。二人で並んで座るが、こなたは疲れ気味なのか、ホンだしに寄りかかるようにして直ぐに眠る。）

こなた：「（眠そうな顔で）電車は涼しくていいよね。というわけで・・・（親指をビシッと立てて）着いたら起こし・・・zzz・・・」

ホンだし：「（驚く）早っ（よりかかるこなたの体の小ささ、暖かさを感じて、幸せな気分になる）・・・ま、いいか」

（しばらくそうして二人で寄り添ったあと、到着する）

ホンだし：「ここが俺の家の最寄り駅だよ。・・・（空を見上げる）雨降り出した？」

こなた：「（まだ眠そうな顔で）みたいだね……とりあえず、行こ。」

（雨脚が突然強くなる。）

こなた：「（二人、駅の入り口へ行って雨の降る空を見る）夏だからね。暑さを払ってくれるのはうれしいけど、傘がないのが痛いよね。急いで帰ろう。ここからどのくらいなの？」

ホンだし：「歩いて10分。」

こなた：「じゃあ走って5分だね。急ごうつ。せつかくの同人誌とか、マンガが濡れちゃったら嫌だし。泣くに泣けないよー」

ホンだし：「おし、んじゃダッシュで。」

こなた：「あいあいさ……Bダッシュね」

（家へ到着。二人ともずぶ濡れの状態になっている。）

第21話

ホンだし：「グッズが濡れなかったのが奇跡だね。」

こなた：「当たり前じゃん。自分が濡れても買ったオタグッズは守り抜くよ。」

・・・あれ？ホンだしさん、服・・・」

ホンだし：「あっ・・・（ブラが透けて見える）」

こなた：「もしかしてホンだしさん、女の子？」

ホンだし：「うう・・・」（胸を隠す）

こなた：「男の子にしては声も高かったし、なんか女の子みたいな肌をしているとは思ってたんだけど。でも背も大きいし、違うのかなって思ってた」

ホンだし：「い、いや、俺は・・・俺は男だよ」

こなた：「じゃあなんでブラつけてるの？」

ホンだし：「うう・・・それは・・・俺はその、変態だから・・・（なみだ目になる）」

（ちょうどそのとき、買い物帰りのお隣の奥さんが帰ってくる）

奥さん：「あらー今晚はー千奈美ちゃん。今日はお友達と一緒に？」

ホンだし改め千奈美「・・・う・・・あ、は、はい・・・」

奥さん：「あら、珍しいわね。それにお友達小さいわね」。こうやって並んできるとますます

大きく見えるわね・・・（しゅんとしている千奈美を見る）あら、ごめんなさいね。」

千奈美：「・・・い、いえ、私は・・・気にしてないです。それじゃ濡れちゃって風邪ひきそうなので、失礼します。」

奥さん：「はいはい。暖かくするのよ」

（二人、千奈美の部屋へ入る）

こなた：「千奈美さんなんだ」

千奈美：「うっ。・・・ごめんっ。うそついて」

こなた：「別にいいけど・・・どうしてそんなうそをついたの？」

千奈美：「だって・・・ネットでは男キャラで通してたし・・・実際にでかくて男に間違われたりもするし」

こなた：「そんなこと気にしないでいいのに・・・しかも自分を変態呼ばわりしてまでかくそうとして・・・（雨に濡れて座っている千奈美を見る）でもこうやってちゃんと近くで見ると、本当に女の子だね。まつげも長いし・・・っていうか・・・ショートでむちゃくちゃ美少女じゃないか！！しかも美少女なのに自分のこと変態属性の男と言いきるなんて・・・。真実がわかったときの衝撃度はめ

がねを取ったら実は美処女でしたっていうギャルゲよりも強いよ。
グッジョブ！千奈美ちゃん！！」

千奈美：「怒ってない？」

こなた：「ぜんぜん怒ってないよ！むしろこれが萌えだよ！萌え！
！ささ、こんなところで
しよげてないでお風呂にはいるよ！一緒に入ろう！」

千奈美：「ええっ！！一緒に？？」

こなた：「もちろんだよ。早く入らないと風邪を引いちゃうでしょ。
二人いっぺんなら
どっちかが風邪ひいたりしないよ。」

千奈美：「うん。服大きいのしかないけどいい？」

こなた：「いい、いい。」

（ふたり、お風呂に入る）

こなた：「ああ、うらやましいなあ、背も高いし、スタイルもいい
し」

千奈美：「（体を隠す）そんなことないよ・・・ちいさいほうが絶
対かわいいよ」

こなた：「萌えっ！！」

千奈美：「（苦笑いする）さっきからそればかりだよ、こなちゃん」

第22話＋らっきーちゃんねる

（風呂からあがる）

こなた：「あゝすつきりしたね〜」

千奈美：「そうだね〜」

こなた：「千奈美ちゃんの部屋みていい？」

千奈美：「うん」

（部屋に入る）

こなた：「おお〜。私の部屋とおなじ感じだね〜。あ、ゲーム」

千奈美：「うん。最近買ったんだ。ゲーセンでやった格闘の前のやつだね」

こなた：「んじゃゲーセンの続きをやりますか」

千奈美：「うんっ」

こなた：「さ〜て、それじゃこれも負けたら罰ゲームといきましょうぜ〜」

千奈美：「なににするの？」

こなた：「負けたほうは明日一日勝者のわがままを聞くこと！」

千奈美：「ええ」

こなた：「性的なわがままも聞かないと駄目ってことにしよう」

千奈美：「私が負けるのわかってて・・・こなちゃんのえっち」

こなた：「おおおお。それ。それこそ萌えなのだよつ。おじさんのツボをついてくるねえ」

こんな感じでこなたの夏休みは始まりました。かがみ、つかさ、みゆきたちの夏休みもきつと思いいに残るすばらしいものに違いありません。彼女たちに、幸多き夏を。

そんなわけで、らき　すたの締め括りはこれになります。どうぞ。

あきら：「らっき　ちゃんねるう！（テーマ流れる）おはらっき
~~~~~！！はいつ、やってきました。らっき　ちゃんねるの時間です！司会私、『アイドルはトイレになんか行きません！』小神あきらと、」

白石：「（緊張気味に）こんばんみ、あきら様のアシスタントを勤めさせていただきます、『富士の樹海はもう勘弁！』白石み・・・」

あきら：「（すばやくさえぎる）の二人でお送りします！（白石：ええっ！！）でも、白石さん、なんかこれ、作者初の百合っぽい小

説らしいんですが、最後のほうは手抜き気味になっちゃってますよね？あきら悲しい……（泣く真似）」

白石：「（啞然とした様子であきらを見ていたが、自分に振られて気を取り直す）そうですね。手抜きといったら読んでくれる読者に対して失礼になりますから、私はそうは言いませんが、確かにちょっと焦り気味な感じはしますね。どうやらちょっと忙しかったみたいでかなりばたたと書いていたという情報がありますね。」

あきら：「（ぶりっこで）やつぱりいゝ、きちんとしたあゝ、計画つてえゝ、大事だと思っんですうゝ。その点、作者がしっかりしてないのが手抜きになった原因かもしれないですゝ。私なんかはあゝ、この小説には一行も出てないですけどゝ、もし出たら、もっと作者の筆が進むと思っんですよねえゝ」

白石：「（うんうんと頷く）ええ。あきら様もし出ていたら、必ず完璧に小説は仕上がっていたでしょうね。もちろん絡みの相手は私、しらい……」

あきら：「（キレる。不細工になって白石をしかる）あゝゝゝん？絡みの相手は？誰？誰って言おうとしたの？ねえ？その薄汚い口から、誰の名前を出そうとしたのかなあゝゝ？」

白石：「（汗をかきながら、おされ気味に）いや、ですから、やはりあきら様がでるってことは、やはり相手のキャラクターとしては私……」

あきら：「（罵声を浴びせる）うぬばれてんじやないわよ！（思い切り耳元で）」

白石：「（うおっ！耳が……）」

あきら：「（白石の顔を覗き込みながら）なに？あたしの相手が、言うに事欠いて

あんただってえ？何言ってるの？あのね、私はアイドルよ。仮にもアイドル。

わかる？（白石、頷く）・・・何黙って頷いてるのよ？（白石、ハイ、という）ちっ・・・たく、最近の事務所って、こういうちゃんとした、当たり前前の受け答えができるようなタレントを育ててないわよね。（アイドルらしからぬものすごい悪い態度で）ま、いいわとにかく、あんた、うぬぼれすぎ。仮に妄想の世界であるとしても私に手を出せると思ってたの？私をどうしようなんて、1万年と2千年は早いわっ。あんたなんかね、その辺にあるTENGAでも使って一人でオナニーでもしてりゃいいのよっ！！」

白石：「（焦って）あきら様、その発言はアイドルとして相応しくないかと・・・」

あきら：「（白石に向かって吼える）うつさいわねっ！！何を発言するかは私が決めるの！そもそもこういう放送はね、アイドルに相応しくない発言の部分はちゃんとカットしてくれるんだから。あんなの薄ら馬鹿な発言と一緒にしないでもらえる？まったく、これだから世間知らずのゆとりは・・・あんたの代わりなんて・・・。（カンプ、時間切れを知らせる）あっ、

もう時間になっちゃいましたっ。もつともつと読者のみんなと楽しい時間を過ごしたかったのにいゝゝ（かわいく泣く）そんなわけで次回作があるかどうか、まったく不明なんです、次回、またお目にかかりましょう。そのときはすこゝく楽しいのができてると思います（はあと）じゃあねっ、ばいびゝゝ（キラッ・・・）・・・

「

## 第22話＋らっきーちゃんねる（後書き）

そんなわけで終わりました。一応夏らしい話にしようとかんばったけど難しかったです。

最後まで読んでいただいてありがとうございます。

もし良かったら感想など聞かせてもらえたらうれしいです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7560f/>

---

らき すた～夏休み前の話

2010年10月10日05時25分発行